

教職員研究チーム活動状況報告書

代表者の所 属・職・氏名	県立和田山特別支援学校 職・氏名 主幹教諭 武田 貴行	研究チーム名 (自閉症児支援チーム)
-----------------	--------------------------------	-------------------------

研究テーマ分類番号 (9)

※県教育委員会のホームページに掲載します。

(1) 研究テーマ
自閉症児の支援及びコミュニケーションツールについて
(2) 研究経過及び具体的な取組
<p>< 5 - 6 月 ></p> <p>* 本校児童生徒への指示伝達手段及び児童生徒の意思表出手段についての実態分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査方法：各担任にアンケート ・ 調査結果：自閉症児 13名 / 53名中 (小1名、中4名、高8名) <p>○ 教師から児童生徒への「指示」</p> <ul style="list-style-type: none"> 主手段 話し言葉のみ 6名 (全員が話し言葉を主手段としていた) その他の手段 (文字、絵、写真、指差し・身振り、具体物) 併用 7名 副手段 (文字、絵、写真、指差し・身振り、具体物) 活用 10名 <p>13名中3名は話し言葉だけで伝わる状況であった。</p> <p>主手段で通じない場合は副手段を併用することにより、1名は十分伝わる、12名は大体伝わるという印象を持っていた。</p> <p>○ 教師から児童生徒への授業等での「説明」</p> <ul style="list-style-type: none"> 主手段 話し言葉 8名 (内3名はその他の手段併用) その他の手段のみ 5名 副手段活用 10名 (内4手段活用1名、5手段活用1名) <p>日頃の指示に比べて話し言葉の割合が減り、視覚的な方法を交える割合が増えていた。</p> <p>2名は十分伝わる、10名は大体伝わる、1名は大体伝わる場合とあまり伝わらない場合があるという印象を持っていた。</p> <p>○ 教師から児童生徒への「日常会話」</p> <ul style="list-style-type: none"> 主手段 話し言葉のみ 12名 (全員が話し言葉を主手段としていた) その他の手段併用 1名 副手段活用 11名 (文字を主に、絵、写真、指差し・身振りの視覚的な方法を多く活用) <p>話し言葉のみは1名であった。</p> <p>3名は十分伝わる、10名は大体伝わるという印象を持っていた。</p> <p>○ 児童生徒から教師への「意思表示」</p> <ul style="list-style-type: none"> 主手段 話し言葉 10名 (内3名は身振り、表情を併用) 副手段活用 9名 (内2名は話し言葉。6名は具体的行動やクレーンで示していた) <p>4名は十分理解できる、6名は大体理解できる、2名は理解できる場合とできない場合があった。できない場合がある2名は、それぞれ3、4の手段が併用されていた。</p>

< 6 - 7月 >

*理解を促す支援ツールの検証、考案、作成

- ・検証：実態調査により、話し言葉を中心に双方のコミュニケーションがなされるなど、障害特性や認知特性の軽い生徒の割合が多かった。しかし一方で、視覚的手段を必要とする児童生徒が存在し、いろいろな手段の活用が見られた。
- ・考案：視覚支援を必要とする児童生徒に対し、1時間を越える時間経過を示すタイムタイマーの作成及び活動統制やコミュニケーションを図るための電子機器を活用について考案した。
- ・作成：タイムタイマーについては、製作キットを購入したが、製作過程が細かく、機能するものが作れなかった。

< 8月 >

*PECS（絵カード交換式コミュニケーション・システム）及び情報端末機器活用についての研修

- ・8月5日 コミュニケーション支援についての研修会
 - ①「携帯情報端末を活用した支援について」 講師：兵庫県立豊岡聴覚特別支援学校 教諭
 - ②「携帯情報端末を活用した支援について」 講師：兵庫県立出石特別支援学校 臨時講師
- ・8月11日 先生と保護者のための学習会
 - ①「携帯電話・スマートフォン等端末を活用したコミュニケーション支援」
講師：兵庫県立豊岡聴覚特別支援学校 教諭
 - ②「自閉症スペクトラムの人へのコミュニケーション支援～理解には視覚的構造化を、表出にはPECSを～」 講師：京都市児童福祉センター 児童精神科医
- ・成果と課題
 - 情報端末機器の活用については、いずれも支援学校の生徒を対象とした実践事例が示され、その活用方法や有効性を学ぶことができた。
 - 視覚支援として写真や絵カード、タイムタイマー等の活用を行ってきたが、それらの多くは情報端末に入れることができるため、自閉症児自らがコンパクトに活用することができ、活用方法も無限に広がっているグッズであることを知る事ができた。
 - その活用はまだ少数で、ゲームでの使用と混同されて現場では批判的な捉え方も見られるが、今後日常的に使われるグッズと成りうる事が伺えた。
 - PECSによる意思伝達は、単にカードを介した表現ではなく、活用に向けてのしっかりとしたステップが踏まれていることを学んだ。
 - 意思伝達の方法が未熟な児童生徒への導入としての有効性は確認できた。しかし、自分なりの方法を身につけている児童生徒に対してより有効な手段として新たに取り入れることや導入時には基本的には二人のトレーナーが関わる必要があることなど、実践に向けての課題も伺えた。
 - PECSの概念と情報端末の活用を融合させることにより、より手軽に意思表出を含めたコミュニケーションを行うことができ、自発的な活動にもつながると考えられる。

< 9 - 12月 >

*情報端末を活用したスケジュール管理等の実践

*PECS用コミュニケーションブックの製作及び活用の実践

- 中学部の生徒を対象に、ipod touch を用いたスケジュール管理の方法を伝え、主体的な活用に向けて実践している。
- 中学部の生徒を対象に、ipod touch を用いて、指差し行動及び書字の向上に向けて実践している。
- 中学部の生徒を対象に、既成のファイルを利用して製作したコミュニケーションブックを活用した意思表示の実践を進めている。